

第一章

会社から帰宅すると、部屋に知らない男がいた。

「こんにちは。お邪魔してます」

（え……誰!?）

床に座っている彼にペコリと頭を下げられ、固まってしまう。

歳は、三十代くらいだろうか？

銀鼠色のシャツに、光沢がある素材のベストを重ね、細身のパンツを履いている。

透けるような白い肌とは対照的な艶のある黒髪をオールバックにし、銀色の細いフレ

ームの眼鏡をかけている。つり目気味の切れ長の瞳や尖った顎がやや神経質そうに映るが、総じて整った顔立ちだと思う。

一言でまとめると、イケメンだが胡散臭い。というか怖い。だって、見ず知らずの人間の部屋に上がり込んでくつろいでるなんて、まともじゃない。

だって、手首から刺青みたいなのも見えてるし！

「ああ、驚かせてしまって申し訳ありません。私、紅瀬（くぜ）と申します」

男は、立ち上がって私に名刺を手渡した。

座っている時は気づかなかったけれど、かなり背が高い。百八十センチはありそうだ。

おずおずと受け取ると『バタフライフィナンス 紅瀬蝶二（くぜちょうじ）』と記してある。

ちらちらと、名刺と紅瀬さんの顔を見比べると、彼が意味ありげにニツコリと微笑んだ。

「二野宮一花（にのみやいちか）さん、ですよね？」

「？ はい……」

「三百万円、今すぐ耳揃えて返していただませんか？」

「はい!？」

思わず、すつとんきような声をあげてしまった。

「そんなお金、私借りてません!」

「ですが、桐野玲音（きりのれおん）さんの保証人として申込書に記載があつたので」

紅瀬さんがぴらりと書類を私の目の前へ差し出す。

確かにそこには、私の名前と住所、電話番号、そして身分証明書のコピー、さらには実印まで貼り付けてある。

（やられた……!）

すべてのピースが頭の中でカチリとハマった。

桐野玲音、というのは同棲している彼氏の名前だ。

合コンで知り合いそのままなんとなく付き合い始めたのだが、気がついたら私の部屋

に転がり込んで住み着いてしまっていた。

一緒に住んで二年くらい経つが、家賃や光熱費、食費は全て私負担。だからといって家事をするわけでもなく、日中はパチンコに出かけて夜はひたすらスマホゲームをやっている。

「俺の職業はパチプロだから」と嘘をついているが、たいして勝てていないのは丸わかりだ。

しょっちゅう私にお金を無心してくるから、苦しいのはなんとなく察していたけど、まさか、そんな大金を借りていたなんて。しかもヤミ金に！

「桐野さんにお貸しした三百万円、今日が返済期日なのですが、全く連絡が取れなくてそれで、申込書に記載があつたこの住所に直接伺つたんですよ」

「そ、そうなんです…。あ、あのつ。玲音なら、もしかしたら近所のパチンコ屋にいるかもしれないので、まずはそちらに行かれては」

「ここへ来る前に寄つてみたんですが、いらつしやいませんでした」

何とか情報を与えて出て行つてもらふと思つたのに、あつさり撃沈してしまった。

（どうしよう……）

「こちらとしても、耳揃えて返していただかないと困りますし」

「で、でも……っ。私、勝手に保証人にされたんです！　こういうのって無効じゃない

ですか？」

「ご本人の同意が得られていないことについては確認不足で申し訳ございません。ですが、もう審査を通して融資を行ってしまったので弁済していただかないと」

（そんなめちゃくちなな！）

と、言いたいのが、紅瀬さんの静かな庄に負けてばくばくと口を動かすことができない。

「そ、そうだ！ ああ……わ、私から玲音に連絡取ってみますから！ もしかしたら出てくれるかも……！」

震える手でスマホから玲音の番号に電話をかける。ほどなくして、呑気な玲音の声が聞こえてきた。

『もしもーし。一花？』

「あつ、玲音！ ああ、今うちに紅瀬さんって人が来てるんだけど……」

『あー！ ごめん、そーいや言うの忘れてた！ 俺さ、しばらく帰れそうにないわ。落ち着いたらまた連絡するから！ じゃっ！』

「えっ、ちよつと待つて……！ ああつ」

玲音は一方的にまくしたてると、電話を切ってしまった。

慌ててリダイヤルするが、時すでに遅し。

『おかけになった電話番号は、電波が届かない所か、電源が入っていないため——』

機械音声が無情に私の耳へ響く。

「どうやら桐野さんには、支払う意思はなさそうですね」

横で私たちの会話を聞いていた紅瀬さんが、鋭い突っ込みを喰らわせてきた。

（どうしよう……）

こういう場合って、警察に連絡すればいいんだろうか？　だって不法侵入だし。そもそもこんな契約、違法だし。そうだ、ちゃんと第三者を入れて話し合おう！

とか考えていると、

「ちなみに、契約の際に桐野さんから鍵の複製許可は頂いておりますので。実印も偽造ではないことを確認しています」

と、紅瀬さんに言われてしまった。

どう考えても、玲音は確信犯だ。身分証明書はともかく、印鑑を持ち出されたのは迂闊だった。実印が押されていると本人の意思に基づいて押印されたと推定されるらしい。つまり警察に駆け込んだところで、私の同意の上で借りたと解釈される。

誰かに入れ知恵されたとは思えないが、玲音は私に背負せる気満々でお金を借りたのだろう。完璧に詰んだ。

「——そういうわけで、三百万円、今すぐお支払いいただけますか？」

「……無理です。あの、分割は出来ませんか……？」

「そうですね。そうすると、金利がかなりかかりますが」

紅瀬さんがトット、とスマホを叩き、画面を見せてくる。

トイチどころではない数字が画面に並んでいて、頭がクラクラしてきた。

血の気が失せて、へたりこんでしまう。

「大丈夫ですか？」

紅瀬さんがしゃがんで私の顔をのぞき込んできた。

「大丈夫……じゃないです……けど。あの……なんとかします、ので」

「具体的には？」

「……………」

答えられず黙り込んでしまった。

ダブルワークでもしようかと思ったが、こんな高額な利息では到底支払いが追いつかない。

（あーあ。完全に詰んでるよ……）

思えばずっと、こんなことの繰り返し。

玲音に限ったことじゃない。

今までつきあってきた人たちはみんなそうやって、私からお金をむしりとって、裏切つて、最後にはいなくなつた。

(もう……疲れたな……)

決して高くない給料で、相手の分まで生活費をまかなえるようになんとかやりくりして、困っていると言われたら、乞われるままにお金を差し出して。常に相手の顔色をうかがって、ビクビクして。尽くして、尽くして、捨てられて。

でも、玲音は優しかった。今までの彼氏みたいに私に機嫌とりをさせなかったし、殴ったり、暴言を吐いたりしなかった。いつも笑顔で傍にいてくれた。仕事がつらい時は愚痴を黙って聞いてくれた。それだけで、良かったのに。

今度こそ、ずっと一緒にいてくれる人が出来たのだと、安心していたのに。

その結果がこれだなんて、笑える。

「……私が死ねば……保険金でまかなえますか？」

ぼそり、と低い声で呟く。

紅瀬さんがわずかに眉をひそめた。

「……そういう返済の仕方は、受け付けておりませんね」

「じゃあ、どうすればいいんですか？ 風俗？ それとも臓器でも売ればいいんですか？ もうどうだっていいですよ。どうぞせ私なんて、生きててもこの先ろくなことなさそうですから」

うつむいたまま、ぼそぼそと呪詛を唱えるような暗い声で呟き続ける。

だって、理不尽に借金を背負わされてしまったのだ。これくらいは言っても許されると思う。

紅瀬さんがしゃがみこんだまま、私を諭す。

「落ち着いてください。給料天引きになります、こちらでお仕事をご紹介しますことも可能ですよ？」

優しい笑みを作っているが、目が笑っていない。これは……おそらくまともな仕事じゃないだろう。

「あなたなら、きつとたくさん稼げますよ。明日、事務所まで来てください。住所は、先ほどお渡しした名刺に書いてありますので。必ず、いらしてくださいね？」

紅瀬さんは穏やかな声で言う、
「では、失礼します」と部屋を出て行った。

私に同情した風を装っていたけれど、この手のひとたちが言う「お仕事」なんてどういうものがすぐに察しが付く。

良くて風俗。悪くて海外に売り飛ばされるか、犯罪の片棒を担がされる。そんなところだろう。

でもこんな人生、もういらないし。いつそ壊れてしまえば、楽になるのかも。

強制的に誰かに終わらせて貰えるなら、そのほうがいい。

「……っ、うう……」

なんでこんなことになっちゃったんだろう。

なんで私はいつも、誰にも愛してもらえないんだろう。

「もうやだ……やだあ……ううう……！」

ぎゅ、と紅瀬さんの名刺を握りしめ、私はうずくまったまま嗚咽した。

翌日。会社が終わった後、私は紅瀬さんの事務所を訪れた。

歓楽街の一角にある、見るからに築年数が古そうなビル。スナックや怪しいマッサー

ジ屋の看板が掲げられている廊下を通り抜けると、奥に『バタフライフィナンス』と書かれたプレートが貼られた部屋にたどり着く。

チャイム——というよりはやブザーに近い小さなボタンを押すと、すぐに紅瀬さんが出てきた。

「ああ、いらつしゃい。お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

所狭しと書類が積まれた雑然とした部屋の中央に置かれた、革張りのソファへ座らされる。

映画やドラマに出てきそうな、いかにもそのスジの人たちの事務所といった雰囲気な、

どんどん緊張が高まっていく。

（ああ、私何させられるんだろ……）

やけくそ気味にもうどうなつてもいいや、とここへ来てしまったけど。いざ現実となる
とやっぱり身が竦む。でも来てしまったのだから仕方が無い。覚悟を決めないと。

「良かったら、どうぞ」

紅瀬さんが、なみなみと紅茶を注いだティーカップを私の前に置いた。

柑橘系の爽やかな香りが、鼻腔をかすめる。

「アールグレイティーです。お口に合えばいいんですが」

「……ありがとうございます」

おそるおそる、カップに口をつける。

温かな紅茶がこわばっていた身体を緩めてくれたのか、張り詰めていた気持ちがほっと
緩む。

「……おいしい、です」

「それは良かった」

紅瀬さんが目を細めて微笑んだ。

昨日と違って、雰囲気が柔らかい。

（もしかして、そんなに悪い人じゃないのかも）

「さて、では早速お仕事の話に移ります」

紅瀬さんは私の前に座り、ファイルをテーブルに置いてパラパラとめくり始めた。

「お願いしたいのは、いわゆるバックオフィス作業です。実は、タピオカミルクティー屋をやることになりましたね。私ひとりでは回らないのでお手伝いをお願いしたくて」

「……え？」

ぽかんとしてしまった。まさか普通の仕事を紹介されるとは。

「二野宮さんは、確かお勤めの会社で総務のお仕事をされてますよね？」

「は、はい……」

そこまで調べ上げられているのかと、内心ぞつとする。おそらく会社名も把握しているのだろう。

この様子だと、私の個人情報もガッチリ掴まれているに違いない。

「私は事務作業が大の苦手です。スタッフのシフト管理や給与計算、資材の管理をお願いしたいんですよ。可能ですか？」

「はい。お役に立てると思います……」

「では、早速勤務条件についてお話させてください。まず勤務時間についてですが――」
私の前に契約書を差し出し、紅瀬さんがひとつひとつ説明をする。

週三日、会社が終わってから三時間ほどの勤務で、土日祝いづれかフルタイムで。平日

は来られる時に来るシステム。給料は十日に一度、手渡し。

そして賃金は、時給換算したら私が勤めている会社の五倍くらいはあった。

「え、あ、あの……お給料、こ、こんなに頂いていいんですか？」

「ええ。深夜と休日手当も含まれておりますし。二野宮さんは経験者ということで、技能手当も加算しました。負債分を天引きしますので、これでも手取りはかなり減ると思いますよ？」

にしても、高すぎて逆に怖い。

（もしかして、怪しいクスリの販売とか手伝わされるのかも……！）

身体を売ると闇バイトに巻き込まれるの、どっちがいいんだろう……なんて考えてしまった。

究極の選択すぎる。でも、個人情報をつかまれてる以上選択肢はなさそうだ。

「——以上、何か気になる点がありますか？」

「あの……総務の仕事以外にも、業務が発生したりしますか？」

「……と、言いますと？」

紅瀬さんが片眉を上げて私を見た。

「た、例えば……裏メニューのご案内とか、そういう……」

さすがに「闇バイトじゃないですよね？」とは聞けずオブラートに包もうとしたんだけ

れど、全然包めてない気がする。

「ああ」と紅瀬さんが察したように微笑んだ。

「ご安心ください。先ほどご案内した内容のお仕事だけです」

「それなら、こんな高額なお給料いただけません。相場なりの金額にしてください」

「金額を下げる交渉をされたのは初めてですよ。理由を聞かせてもらえませんか？」

「……気を悪くしないでいただきたいんですけど……高額な分、何か別のことを要求されるのでは、と不安になってしまおうので」

そう答えると、紅瀬さんは顎に手を当ててじつと何か考え始めた。

「なるほど。法に触れるような仕事をさせられるかもしれないと思っていらつしやるんですね」

「……はい……すみません……」

「では、追加で業務をお願いしましょう。身体を求めることになりますが……」

「……っ」

やつぱり、そう来たか。

（でも、この金額なら仕方ないのかも。風俗で働くよりは……）

と覚悟を決めたのだが。

「私の抱き枕に、なっただけませんか？」

「……は？」

紅瀬さんの発言にきよんとする。

もつと口にするのも恥ずかしいような行為を要求されるのだと思っていたので、拍子抜けしてしまった。

「だ、抱き枕……ですか」

「ええ。なかなかストレスが溜まる仕事をしているものでしてね。優しく癒してください。相手は欲しかったんですよ。良かったら寂しい独り身にお付き合いただけてませんか？」

そういえばソフレなるものもあるらしいし、その一種だろうか。

（抱きしめられるだけ、なら……でも、どうしよう……この間会ったばかりの人とそんなことするなんて）

一瞬、玲音の顔が頭をよぎる。

私を身代わりにして逃げたのに、まだ未練があるんだろうか？

うつむいて唇を噛みしめていると、紅瀬さんが私の耳元に唇を寄せ、低く囁いた。

「……ご安心を。それ以上は求めません。検討していただけますか？」

「……っ」

気がつくのと、こくと首を縦に振っていた。

魔が差したとしか思えない。こんな怪しい『業務』を引き受けてしまうなんて。

「良かった。では早速、お願いします」

「えっ……あっ!？」

紅瀬さんが私の隣に座り、ぎゅつ、と腰に抱きついてきた。

そのままベッドに押し倒されて更に強く抱きしめられる。

優しいけれど、逃げることを許さないような。

「ああ……温かくて柔らかい……とても、抱き心地が良いですね」

肩に顎を寄せられ、耳元で囁かれる。

吐息が鼓膜を震わせ、ゾクツとしてしまった。

「とても……癒されます。身体がほぐれていきますね。こうして、誰かを抱いて眠るのは
いつぶりでしょうか。どうやら……思っていたより私は、人肌が恋しかったようです」

すり、と肩に頬を寄せられる。

まるで、大型犬に甘えられているようだ。

彼が頬ずりするたびに、ベルガモットのほろ苦い香りが鼻腔をかすめる。まるで紅茶の
缶を開けた時のような、フレッシュな香り。

「紅茶、好きなんですか？」

「え？ ああ……そうですね。それなりに。どうしてですか？」

「……紅瀬さんから、さっき飲んだ紅茶と同じ香りがしたので」

「よくお気づきになりましたね。トップノートがアールグレイティーなんですよ。この香りに気づいたのは、あなたが初めてです」

紅瀬さんがふつと口元を緩める。

さっきまでの営業スマイルとは違う、リラックスした表情があまりにも柔らかくて、優しく。

この人が私を借金地獄に突き落とした張本人だと言うことを忘れてしまいそうだ。

紅瀬さんは私を抱きしめたまま、すう、すう、と寝息をたてている。

(……無防備な人だな。債務者相手に寝顔なんか晒しちゃって)

勝手に保証人にされて、借金を背負わされて。

人生お先真つ暗で、この人を恨んでもおかしくない状況なのに。

不思議と、心は穏やかだ。

(あ……眠くなつてきちゃった……)

昨日、ほとんど眠れなかったせい、一気に眠気が襲いかかってくる。

(ちよつとだけ……一緒に寝ちゃおうかな……)

目を閉じると、ベルガモットの香りが私を包む。

その香りに誘われるように、とろりと眠りに落ちていた。

「……さん。二野宮さん」

ぼんやりと目を開けると、紅瀬さんのどアップが視界に飛び込んできた。

「……わっ!? す、すみません！ 私、いつの間にか寝ちゃつてたみたいで……」

「いえ。よく眠れたようで何よりです。疲れていらつしゃったんですね」

「……業務中なのに……ほんとすみません」

「とんでもない。寝顔に、癒されましたよ」

ニッコリと紅瀬さんが微笑む。一体どんな寝顔を晒していたのか。

「今日はこれで終了です。お疲れ様でした」

「お疲れ様です。あの……明日の夜から出勤しますので」

「ええ。頼りにしていますよ。では、また」

紅瀬さんに見送られ、部屋を出る。

なんだか狐につままれたような気分だ。

何もかも上手く行きすぎているというか。

もしかして、これからとんでもない落とし穴が待ち受けているのかもしれないけど。

(……紅瀬さんは、嫌いになれないな)

昨日はずっと、死ねば楽になるのかな、なんてベッドの中で考えていたのに。

そんな気持ちは、気づいたら消え失せている。

代わりにさつきまで私の肩に寄せられていた彼の頬や、腰を抱く腕の力強さを思い返して、頬が熱くなる。

まだ、ベルガモットの残り香が私を取り巻いているかのようで――

ふわふわと夢見ごこちのまま、帰路についた。

第二章

――紅瀬さんが経営するタピオカミルクティー屋さんで働き始めて、しばらくが経った。会社が終わった後、週三〜四日お店に顔を出し、二週間毎にアルバイトの店員さん達のシフトを組んで、タイムカードから給与計算を行う。

お店の資材発注や在庫管理、それにまつわる伝票や帳簿作成。

それだけでは申し訳ないからと、フライヤーやポップを作ったり、SNSのアカウント管理を行ったり。

会社ではできないようなことも任せてもらえて、楽しく仕事ができていた。

今のところ、怪しいクスリも売っている様子はなく、場所が歓楽街の中にあること以外は、いたってごく普通のお店だ。

仕事もタスクをこなしていれば来られる時に来ればいいし、ホワイトそのもの。待遇が良すぎて怖くなるくらいだ。

「紅瀬さん。今日のレジ締め終わりました。あと、再来週のシフト組みと、SNSの更新も」

「ああ、ありがとう。仕事が早くて助かります。……じゃあ、例の件、お願いしてもいいですか？」

紅瀬さんがバックヤードの隅に置かれているソファーに座り、ポンポンと隣を叩く。

私はノートパソコンを閉じて立ち上がり、彼の隣に座った。

「……失礼します」

私が横に座ると紅瀬さんが私の腰を抱き、そつとベッドへ押し倒す。

「……ふう。やはりあなたを抱くと癒される。一日の疲れが取れますね」

紅瀬さんがすり、と私の髪に唇を寄せる。

総務の仕事が終わった後に行う、私のもう一つの「業務」は彼の抱き枕になること。

紅瀬さんは私の仕事が終わるような頃を見計らって現れ、業務報告を受けるとこうして私を抱くのだ。

……誤解を招きそうな表現だけど、本当に抱き枕係なので仕方ない。

「あの……お給料の件なんですが」

「ええ。どうしました？」

「天引きされると聞いていたんですが、満額頂いていたような……」

おずおずと切り出すと、紅瀬さんが「ああ」と微笑む。

「返済分は私の方で立て替えておきましたから。滞りなく、完済出来ますよ」

「で、でも……」

紅瀬さんが私の唇に指をそつと押し当てる。

「いつも、私を癒してくださいありがとうございます。特別手当とでも思ってください」

「でも……そんなの申し訳ないです。必ず、返しますから」

「分かりました。では気が向いた時で結構ですよ」

そう言つてぎゅう、と私を抱き寄せ、すぐに寝息を立て始めた。

紅瀬さんはかなり疲れているのか、いつも私を抱いたまま眠ってしまう。

寝ぼけて頬ずりしたり、ぎゅう、と抱き寄せられたりするけれど。それ以上は、何もな
い。

だから安心……なはずなのに。心のどこかでそれを残念に思っている自分がある。

(……あ、今日はバニラの香りがする)

紅瀬さんの首筋から、ふわりと甘い香りが立ち上る。

ベルガモットの気配もするから、同じ香水だろうか。

(いい香り……)

もつと味わいたくて、首筋に顔を寄せて匂いを嗅ぎたくなってしまう。

男の人の香水の香りなんて、気にしたことなかったのに。

「ん……すう……すう……」

紅瀬さんが私の胸元に顔を埋める。

ふにゅ、と彼の鼻先が胸に当たってくすぐったい。

(う、こ、この体勢はちよつと……)

どうにか身体をよじって紅瀬さんの顔を胸からずらそうとするが、ガツチリ腰をホールドされていてうまく動けない。

「くう……すう……」

紅瀬さんは横向きになり、頭をおっぱいに載せるようにして眠っている。

(ち、乳首に顔が当たってるし……)

彼が寝返りを打つたびに、ブラ越しに乳首が擦れてじわつと下腹部が熱くなってしまう。

紅瀬さんは寝ぼけているだけ、他意はない。分かっているけど。

(こんなことされたら……したく、なっちゃうじゃない……つ)

もじもじと太ももを擦り合わせてムラムラをやりすごす。まさかこんな発情の仕方をするなんて想定外だ。

そんなに私は、欲求不満だったんだろうか。そういえば、玲音とはいなくなる数ヶ月前からセックスしてなかったし。

（玲音……今どこにいるんだろ）

ダメ元でメッセージアプリで呼びかけてみたが、既読すらつかなかった。

こんなことなら位置情報アプリでも入れておけば良かったんだろうか？　それも玲音に情報を弄られたら無意味か。

いわゆるダブルワーク状態だから、会社が終わってからここで仕事するのはちよつと大変だけど。

忙しくて何も考えずに済むのはありがたい。

ひとりになったら、裏切られたあの時の絶望が蘇ってきてとても耐えられないと思うから。

（玲音がもし戻ってきたら……私はどうするんだろう？）

何事もなかったかのように受け入れるんだろうか。それとも、三行半を突きつけてすっぱり別れるのか。

本当は、結論を出したくない自分もいる。

何も考えたくない、曖昧にしておきたい。

卑怯だけど。

（こんなんだから、ダメ男にばかり引つかかっちゃうんだよね……）

「すう……すう……」

ふに、と紅瀬さんの唇が乳房に当たってぞくり、と尾てい骨あたりから甘い痺れが這い上がる。

ふに、ふに、と何度も胸に紅瀬の唇が触れて。その度にぞくつ♡とお腹の奥が熱くなる。（ど、どうしよう。こんなことされたら、もう――）

「……あつ」

紅瀬さんがぱちりと目を開き、身を起こす。

彼の重みがなくなり、一気に身体が軽くなった。

「すみません。随分長いこと眠ってしまったようで……重たかったです」

「い、いえ……あ、あの……まだ、お疲れじゃないですか？ もっと……ゆっくりしてください」

「大丈夫ですよ。疲れは大分取れましたから。もう今日は終わりにしましょう」

「……い、いや、です」

反射的に、私は彼にしがみついていた。

「も、もっと、色んなところ、触って……ください」

私は何を言ってるんだろう？

自分から誘うようなことをして。

でも、身体の奥に渦巻く熱い疼きが収まらなくて。このまま帰るなんてとてもできない。
「震えているじゃありませんか。無理はしないでください」

小刻みに揺れる肩に、紅瀬さんの大きな手が載せられる。私は「いやいや」をするように小さく首を横に振った。

「む、無理なんて、してません……あのつ、プロの方みたいに上手く出来ないかもしれないませんが、色々、出来ますし。わ、私、紅瀬さんと……っ」

唇に、紅瀬さんの指が押し当てられた。まるで私の言葉を封じ込めるように。

「気の迷いですよ。今日はもう、帰った方がいい」

優しく突き放されたようで、ずん、と鉛を飲まされたみたいに身体が重くなる。

（一人で盛り上がって、馬鹿みたい）

紅瀬さんは私のことなんて、ただの事務員としか思っていないのに。

「へ……変なこと言ってごめんなさい。わ、私、地味だし、色気ないし、女としてなんて見られませんか。もう、二度とこんなことしませんから……」

うつむいたまま、早口でまくしたてる。顔を上げたら泣きだしてしまいそうで。

恥ずかしくて情けなくて、もう消えてしまいたい。

「……困りましたね」

ぽん、と私の頭に、紅瀬さんの大きな手が置かれる。

ぽん、ぽん、と何度も形を確かめるように触れるその手は、身の置き所がなくて戸惑っているようだ。

「そんないじらしいことを言われたら、抑えが効かなくなってしまう」

「……え？」

「ずっと、眠ったふりして触れるだけで、我慢していたのに」

「……ええ？」

「抱きしめて、押し倒して、キスをして、……その先も、全部したくなってしまう」

「ええええええええ!!」

思わず叫んでしまった。それって、もしかしくなくても――

「今までのつて……わざとやってました？」

「すみません。セクハラだと分かっていたのですが」

紅瀬さんが額に手をやり、申し訳なさそうにうつむく。僅かに目の縁が赤く染まっているのを、可愛いと思ってしまう。

「合法的にあなたに触れるには、タヌキ寝入りを決め込むしかなくて」

「そ、そんな気を遣わなくても……」

「……だってあなたには、桐野さんがいるでしょう」

紅瀬さんが湿り気を帯びた声で、呟く。

「れ、玲音のことを気にするなんて……らしくない、ですよ。それこそ……強引に押し倒しても、いいのに……っ」

「いいんですか？」

身じろぎもせずに、じっと見つめられる。

切れ長の瞳に心の奥を見透かされているようだ。

返事の代わりに、ぎゅつと彼の手を握る。

紅瀬さんが微笑み、私の耳元に唇を寄せた。

「……あなたと、セックスがしたい」

砂糖菓子のような甘い囁きが耳朶を打つ。

耳からかあつと熱が上って、顔がゆでだこみたいに真っ赤になっているのが分かる。

「……了承、していただけますか？」

顎に手を掛けて持ち上げられる。

うなずいてしまったら、きつともう戻れない。

けれど――

「……はい」

潤んだ瞳で、紅瀬さんを見つめる。

紅瀬さんは目を細めて私に顔を近づけ、唇をそっと落とした。

「ん……ちゅ……はあ……っ♡」

ついばむような口づけのあと、れろり♡と唇を舌で優しくなぞられる。

舌先で愛撫されているようで、後頭部がじんわり♡と熱い痺れに浸されて自然と唇が半開きになる。

待ってましたとばかりに紅瀬さんの舌が割って入り、私の舌を探すようにチロチロと舌先を蠢かせた。

「っ……ちゅ……ふう……。あなたの中に……入ってしまいました……っ、んっ……ああ……熱く潤んでいて……とても甘い……。このまま、溶け合ってしまいたくなる……」

唇をすぼめ、誘うようにちゅうう♡と私の舌へ吸い付く。

吸い出された舌にビリビリ♡と甘やかな刺激が走り、びくん♡と腰が震えてしまう。

（キスされてるだけなのにつ♡おまんこ♡♡キyunキyunしてきちゃうう……♡）

「ちゅ……ちゅう……ああ……可愛い唇……全部、食べてしまいたい……」

唇で私の舌を優しく挟み込み、慈しむように吸い上げる。

口腔内をたっぷり♡と愛撫され、唾液がじゅわっ♡と溢れてくる。

「はふう……♡ちゅ、んちゅ……ぢゅる♡ん、ふうう……♡」

紅瀬さんと貪るように舌を吸い合う。もつれ合う舌から糸を引いて、唾液が滴り落ちる。

こんなにキスが官能的だなんて知らなかった。

「キス、上手ですね。桐野さんともこんな風にしていたんですか？」

「いえ……玲音はそんなに、キスは、好きじゃなくて……」

玲音は、挿入以外はあまり興味がないようだった。

キスもせがめばしてくれるけれど、軽いフレンチキス程度で。それよりも早く挿れていつてしまいたい、とばかりに性急に身体に触れていた。

「勿体ない……こんなにいやらしいキスをするのに」

「あ……ん……はあ……♡」

れろり♡と頬の裏側を紅瀬さんの舌尖が舐め上げる。

（ああ……♡おまんこ舐められてるみたいな気持ちになっちゃう……私、こんなにいやらかったつけ……？）

口の中をまさぐりながら、紅瀬さんの指が私の頬から首筋を辿り、鎖骨をなぞって胸元へ降りる。

紅瀬さんは背後から手を回すと、丁寧にブラウスのボタンを外し、ブラ越しにそつと手を添えた。

「可愛いブラですね」

ふ、と紅瀬さんが目を細める。

「う……じ、地味だから恥ずかしいです。こんなことなら、ちゃんとしたのをつけてくればよかった……」

「ふふ。今つけているものも、あなたにぴったりで素敵だと思いますが……良かったら、プレゼントしましょうか？」

「え……あつ……♡そんな……悪い、です♡」

「私好みの下着をつけていただく、というのも嬉しいかと思ひましてね。今度、一緒に選びに行きましょう」

「ふああ……♡」

壊れ物を扱うかのように乳房を持ち上げられ、やわやわと揉まれる。

触れるか触れないか、というくらいの軽いタッチなのに、ぞくぞく♡と背筋が波打ってしまう。

「桃に、触れているみたいですね。柔らかくて瑞々しくて……少しでも力を込めると、手の中で崩れ落ちてしまいそうなほどに、儂い」

「は……ああ♡つ、ううん……♡」

むしろ、もつと強く揉みしだいてほしい。紅瀬さんの手の中で崩れ落ちるなら、本望だ。
(ああ……気持ちいい、のに……イケない……♡♡)

じんわりと熱が乳房を蝕み、うつすらと肌に汗をかいている。緩やかすぎる刺激は、た

だ快感の輪郭を際立たせるだけで、核心にたどりつけなくてもどかしい。

「その儚さが……愛おしい」

細く長い指がつうつとブラと乳房の境界線をなぞり、かりつ♡とブラ越しに両の乳首を引っ搔く。

「んう……♡」

たつたそれだけで、ぴんっ♡と乳首が硬くしこるのが分かる。

（やだぁ……♡乳首っ、ちよつと弄られただけなのにつ♡こんなにビンビンになるなんて♡）

「ふふ、もう乳首が勃っていますね。私の愛撫で感じてくれているんですか？」

「ふぁぁ……♡んっ♡すみません……っ♡」

「どうして謝るんですか？ 嬉しいですよ。もつと……たくさん感じてください。いやらしい声をたくさん聞きたい」

艶めいた低音ボイスが、鼓膜を震わせる。

紅瀬さんに触れられるたび、囁かれるたび、ゾクゾクする。どこもかしこも性感帯になったみたい。

「ブラの上からでも分かるくらい、硬くなっていますね。グミのようで可愛い」
くにくに♡と尖った乳首を乳輪ごとつままれ、指腹で押し潰される。痛いような、くす

ぐつたいような悩ましい感覚に、勝手に腰がくねってしまふ。

「んああ♡だ、だめえ……♡はう……んう♡」

ぐに♡ぐに♡と引つ張り上げられる度に、腰が浮き上がってお尻にきゆう♡と力が入る。
(もつと♡もつと強くしてほしい♡丸出しのおっぱいをつ、真っ赤になるくらい痛くぎゆう♡♡と絞って、乳首♡♡引つ張ってほしい♡♡)

自分にこんな願望があるなんて。

だって、おっぱいだけでこんなに感じられるなんて、知らなかったから。

「ふぁ……♡あああ……♡も、もつと……強くして、くださ……♡」

紅瀬さんを見上げ、ねだるように甘ったるい声ですがりつく。

こんな媚びを含んだ声が自分から出るなんて。

「いいんですか？ 痛みを与えることになってしまいますが」

「いいん……です♡乳首も♡おっぱいも♡痛くして……欲しい……♡♡♡」

「あなたが望むなら——好きなだけ、痛くしてあげましょう」

紅瀬さんの手が私の背中に周り、ぶち、と器用にホックを外してしまふ。

まるでプレゼントの包み紙をほどくようにブラを脱がされると、自由になった乳房がぶるんと揺れた。

「綺麗な形をしているね。お椀型で、ツンと上向きで……とても、好きな形だ」

ふに♡と紅瀬さんの手が下から乳房を持ち上げる。

たぷ♡たぷ♡と指先で乳房を揺らしながら、すりすり♡と親指で乳首をさする。

円を描くように指腹で撫でられ、乳首から背中を甘い痺れが伝う。

「は……はあ……♡んう……あ……っ♡」

（おっぱいっ♡紅瀬さんに直にイジられてる♡乳首っ、もつとビンビンになっちゃうう

♡）

「腰が、ヒクヒクしていますね。乳首がそんなに好きなんですか？」

「はひっ♡好き……♡かもっ♡こんなの、初めてでえ……♡」

「初めて……ああ、嬉しいですね。では、乳首でイったこともない？」

「ない……ですっ♡こんなに丁寧につ♡乳首っ♡弄ってもらえなかったからあ……♡」

「桐野さんは、ずいぶん勿体ないセックスをしていたんですね。こんなに感じやすくていやらしい身体をしているのに……♡」

きゆうう♡と乳首をつまみあげられ、ぶるぶるっ♡と揺らされる。

そのまま何度も強く引つ張つては指を外され、引つ張つては外されを繰り返す。勃起した乳首をぱちんっ♡と指で弾かれる度に、腰がかくかく♡とヘコつく。

指一本触れられていないのに、下腹部がずときゅん♡きゅん♡疼いて熱い。

股間がびっしょり♡濡れて、ショーツが湿って気持ち悪い。

「あう♡あつ♡あああ♡やあ♡これっ♡好きっ♡すきい♡」

「そんなに腰を振って……乳首だけで、イケそうですね」

「はああ♡あつ♡あつ♡ごめんなさいっ♡私ばっかりっ♡気持ちよくなってる♡」

「謝る必要はありませんよ。感じるあなたを見て、私も興奮しているんですから……♡」

紅瀬さんの胸元から立ち上る、ベルガモットとバナラの香り。かすかに牡の匂いが混じっているような気がして——うっとりしてしまふ。

「あ……あ♡嬉しい、です……♡」

「だから、遠慮せず——イって、ください」

むにつ♡と乳房を持ち上げられ、乳房の根元を握りしめられ、乳首をきゅうう♡と押し潰される。

そのまましこっ♡しこっ♡と勢いをつけて抜かれ、「ひゃうう♡」と声が裏返った。

「やああ♡乳首っ♡シコシコっ♡だめっ♡ほんとにつ♡イっちゃうからああ……♡」

「言ったでしょう？ イってくださいと。それとも……命令した方が、いいですか？」

首筋に顔を寄せられ、耳たぶを軽く噛まれる。

「ひゃうううう♡」

ぞくぞくぞくっ♡と寒気に似た快感が背筋を駆け上った。

「紅瀬さんに……めっ、命令……してほしい、です♡」

「ふふ。あなたはMの素質があるようだ。では、命令しましょう。乳首で……イキなさい」

しこしこしこしこつ♡♡

ビンビン♡に尖った乳首を根元から抜きあげられ、きゅううん♡と下腹部が熱くなる。紅瀬さんの体温が移されたみたいに、乳首が内側から火照って、おっぱいとおまんこが繋がったみたいにジンジン♡する。

（うそおつ♡乳首だけでっ♡ホントにイっちゃうっ♡おまんこっ♡触られてないのにつ♡ぐちよぐちよになつてっ♡チクイキするっ♡）

がくがくと小刻みに腰を揺らし、喉を反らして「あひっ♡」と掠れた喘ぎ声をあげる。淹れ立ての紅茶みたいな甘やかな香りに包まれて、夢うつつになつて頭がクラクラする。

「もうイキそうですね。さあ……イク時はちゃんと私に教えなさい？」

きゅっ♡とどめのように、乳首を強くつねられる。ビリビリっ♡と尾てい骨から頭のとっぺんまで、快樂電流が一気に駆け抜けた。

「ふあっ♡ひやっ♡あうう♡あんっ♡あっ♡イッ♡イク♡イきましたゅ♡あ、んっ♡おお♡ひっ♡んううううう♡」

びくっ♡♡びくっ♡♡

目の前が真っ白になつて——気がつくと、

じゅわああ……♡とぐちよぬれのショーツに、温かい蜜が溢れて新たなシミを作っていた。

（イっちゃった♡乳首だけでイっちゃった♡あああ……♡）

「はあ……♡はあ……♡」

絶頂の余韻に浸り、くつたりと身体を紅瀬さんの胸に預ける。

紅瀬さんは脱力しきった私の身体を抱え、ぱかつ♡と両足を開かせた。

「ひああ♡えっ、ちよつと、紅瀬さんっ……!？」

「休んでいる暇はありませんよ。ほら……こんなにぐちよぐちよに濡らしているのに……」

「

色が変わるほどにびつしより♡濡れたショーツのクロッチを、紅瀬さんの指が無でる。

「あつ……♡い、今触られたらあ……♡」

布越しに割れ目をなぞられ、くに、と押し込まれる。

くぷり、とショーツが淫裂に食い込んで、新たな快感の芽が生まれてしまう。

「だめ……です♡か、感じ過ぎちゃう♡からっ……♡はあああ……♡」

「だから、いいんでしょう？ 我を忘れるほどに感じて、イキまくるあなたが見たい」

指先がクリトリスを捉え、ショーツごしにびん♡ぴん♡と弾かれる。

「ひ♡あつは♡ホントにっ♡だ、だめです……っつてばああ♡」

「ふふ。ショーツがぐちょ濡れでおまんこに張りついてるじゃないですか。これじゃ履いている意味がありませんね。おまんこクリトリスの形がはっきりと分かる」

親指の腹でぐにいとクリトリスを押し潰されて腰がビクンと跳ねる。

そのままゆるゆると円を描くように肉芽を撫で回され、ツンと淫核の中心が痺れる。

「あつは♡いじわる、しないでえ……♡ひう♡んっ♡はううん♡」

「意地悪？ 自分から腰を突き出して、クリトリスを私の指に擦り付けているじゃありませんか。弄られるのを、あなたが望んでいるんですよ」

くりゅ♡くにくにつ♡

肥大したクリトリスを、紅瀬さんの指が根元から擦り上げる。

裏筋をぞりりっ♡と擦られて、お尻がぐぐっ♡と持ち上がった。

（こんなっ♡ぽっくり♡股を開いてっ♡自分からおまんこ擦りつけてっ♡私っ♡どんどんいやらしくなってるう♡）

こすこす♡と小刻みに腰を揺らして、クリトリスをべったり♡と紅瀬さんの指に押しつける。

布越しの刺激は、快いけれど。膜を隔てたみたいにもう一步ほしいところに届かない。もう自分か脱いでしまおうか、と指をショーツにかけようとする——するり。

私のもどかしさを察したように、紅瀬さんの手がショーツを引きずり下ろした。

「ひゃあ……♡」

くぱ♡と紅瀬さんの手がおまんこを割り開く。

（紅瀬さんにつ♡おまんこ見られてるっ♡恥ずかしいっ♡）

「ああ、もうドロドロだ。ピンク色のおまんこがヒクヒク♡して愛液が糸を引いて垂れるじゃないですか。ここまでよく我慢しましたね」

紅瀬さんがつう♡と内ももを撫でる。それだけでビクビク♡と腰が引きつれてしまう。

「さあ、次は中で……好きなだけイカせてあげましょう♡」

紅瀬さんの人差し指がつぶり、とぬかるんだ淫肉に沈み込んだ。

「あ♡ひっ♡ふっ♡うううう♡♡♡♡」

にゅっ♡♡にゅっ♡♡にゅっ♡♡

膣内の人差し指が浅く淫裂を擦る。

ドロドロにふやけた肉襞をかりかり♡と引っかかれると、じゅわああ♡と甘い疼きが生まれて更に蜜が染み出す。

（ああああ♡クリで、イキかけたばっかりなのにつ♡こんな風におまんこ弄られたらああ……♡♡♡）

緩やかでリズムカルなピストンに合わせて、自然と腰がくねりだす。

「ぐちゅぐちゅといやらしい音がしていますね。指もぐっぽり呑み込んで……もう指がおまんこ汁でベトベトですよ」

「ひやうん♡ごめんなさい♡ごめんなさい♡おまんこぐちゅぐちゅ指で抜き差しされるの♡気持ちよすぎてえええ♡」

「ふふ、いい子だ。これなら、指をもう一本増やしても良さそうですね」

にゅぽおお♡

膣内に中指が侵入し、くにっ♡と優しく押し広げられる。

「ひゃあ……♡」

指先が、ゆつくりと入り口から抜き差しされる。

二本の指はぶずぶ♡とふやけた膣筒に吸い込まれ、お腹の裏側でくつと折り曲げられる。

ぐにっ♡ぐにっ♡

中指の腹がクリトリスの裏側のざらりとした部分に触れ、くると円を描くように撫でまわす。

と同時に肉芽に親指がのびて、ぐにぐに♡と指腹でこね回される。

「ああああ♡クリとおまんこ同時責めなんてええ……♡♡」

ぐっぽ♡ぐっぽ♡と空気と愛蜜が混ぜ返されるような、低く淫らな音が部屋に響く。

クリとナカを同時に擦られて、もうおまんこがきゅんきゅん♡しっぱなしだ。

「はっ♡ひ♡そ、そこっ♡きもちいい♡おまんこっ♡じゅわじゅわっ♡♡蕩けそうっ♡」

「フフ、本当に気持ち良さそうな顔ですね。足をぱっくり♡M字に開いて、腰をへこへこ振って……。普段のあなたからは想像出来ないくらいに卑猥な姿だ」

「ああああ♡みつともなくてごめんなさい♡♡嫌い♡♡♡ならな♡♡♡い♡♡♡で♡♡♡え♡♡♡……♡♡♡」

「とんでもない。素直に感じてくれてむしろ♡♡♡ん♡♡♡ん♡♡♡……♡♡♡愛し♡♡♡さが♡♡♡増♡♡♡していますよ。さあ、もっと奥深くで中イキを、教えてあげましょう♡♡」

くん♡♡と更に深いところへ指が差し入れられる。

「……う、あ♡♡♡♡♡」

指腹でとん♡♡と膣の行き止まりを叩かれる。

見えない力で押し上げられたかのように、腰が大きくびくびく♡♡♡と跳ね上がった。

（何これ♡♡♡こんな知らない♡♡♡）

こりこりしたところをとん♡♡♡とん♡♡♡♡とリズムカルに叩かれ、お尻がひくひく♡♡♡とひきつれる。

お腹の奥がカアツと熱くなつて、子宮がきゅん♡♡きゅん♡♡と疼く。

「ああ……簡単にたどりついてしまった。あなたの奥は、浅くて狭くて……とても可愛らしいですね。もしかしてこれも、初めてですか？」

「はひっ♡初めて……です♡あっ♡ああ♡」

「ふふ、初々しい反応ですね。また、あなたの『初めて』を貰ってしまった」

ちゅ、ちゅつと首筋に唇を落とされながら、ポルチオをすりすり♡と優しく撫でさされる。

触れるか触れないかの柔らかい愛撫なのに、身体の芯を握られてぐちゃぐちゃにされているような快感に身体を支配されて。

頭までドロドロと、快楽の熱に蕩かされてしまいそう。

「ひああああ〜♡しきゅううっ♡さささすしないでええ♡♡おかしく、なる、からああ♡♡」

のけぞり、喉を引きつらせて喘ぐ私を抱きしめ、紅瀬さんはゆるゆると秘奥をかき回し続ける。

ぐぢゅっ♡ずにゆにゆ♡ぐぼっ♡ぐぼっ♡

卑猥な水音が股間から響いて、時折蜜がぷしゅつとしぶく。

指で小刻みに子宮口を揺らされ、ジンジンと甘い痺れが秘奥に溜まって、爆発しそうだ。

「ああ……キュウキュウ指を締め付けて……もうイキたくてたまらないって感じですね？」

「はひひひ♡イキたい……れすっ♡紅瀬さんの指、でっ♡ポルチオこすこすされてっ♡

「アクメっ♡したい……っ♡♡」

すがるように、紅瀬さんのシャツをぎゅう♡とつかむ。

紅瀬さんが私の髪を撫で、低く囁いた。

「いいでしょう。桐野さんからあなたのポルチオアクメ処女を、奪ってさしあげます」
きゅう♡♡ぐにぐに♡ぐにいい♡

紅瀬さんの指が優しく、けれど容赦なく秘奥を責め立てる。

強烈な悦痺れが束になって私の身体を埋め尽くし、一気にてっぺんへと押し上げていく。

「あゝ♡♡っうううううゝ♡もお無理っ♡いいいい♡イキますううう♡」

「誰に、どうやってイカされる？　ちゃんと……口に出して言ってごらんさい」

「紅瀬……さん……♡れすう♡紅瀬さん♡誰にも弄られたことがないおまんこの奥っ♡指でっ♡犯されてっ♡初めてのポルチオイキ、しちゃいますうう♡♡」

目の裏で火花が飛び散ってチカチカして、頭の中ではちん！　とヒューズが弾けとぶ。

「ついいいいゝ♡お……っ。っは♡ひうううゝ♡♡」

怒濤のような喜悦が押し寄せ、がくがくがくっ♡と大きく全身をわななかせる。

ぶしやああああ♡♡♡

淫裂から潮が噴き出す。

（うそおお♡♡潮噴いてるっ♡私っ♡潮噴きながらイってるうう♡♡）

びくん♡びくん♡と何度も痙攣を繰り返し、私はかくんと紅瀬さんの腕の中で崩れ落ちた。

「ひゃ……はああ……♡あ……♡あああ……♡」

はあ、はあと浅い呼吸を繰り返し、身体を小刻みに震わせる。

紅瀬さんに弄られ続けて真っ赤に充血したおまんこからは、とぷとぷ♡と蜜が溢れ続けている。

ジンジンと子宮が痺れてお腹が熱い。

何もかもが初めて知る感覚で。受け止めきれないほどの快感に途方に暮れてしまいそうだ。

（こんなの……おちんぼ挿れたら、どうなっちゃうんだろ……♡）

もう何も考えられない。紅瀬さんと、セックスしたい。もつともつと、気持ち良くなりたい。

「っ……あ……♡」

私の考えを読み取ったかのように、紅瀬さんが腰を私のお尻に押しつけてきた。

（こ、これって紅瀬さんの……だよな。おつきくて、熱い……♡）

剥き出しのお尻に感じるズボン越しの膨らみの熱は、イッたばかりの身体を疼かせるには充分で。

私は自分から指を、紅瀬さんの股間に這わせていた。

「……お、大きくなって、ますね……♡」

「ええ。あなたがイクところを見て、昂ぶってしまつて……♡もう、痛いくらいに勃起しています」

「……っ♡」

思わず、ゴクリと喉が鳴ってしまった。

私の欲情を読み取ったかのように、紅瀬さんが耳元に唇を寄せる。

「……言つたでしょう？ あなたとセックスがしたい、と。叶えて、いただけますよね？」

うつむき、コクンと頷く。

「少し、待ってください」

紅瀬さんが微笑んで立ち上がり、机の引き出しから小さな黒い箱を取り出す。

ソファに戻ってきてズボンを脱ぐと、慣れた手つきで隆々と天を仰ぐ肉棒へ避妊具を装着した。

（お、おっきい……♡）

触れた時点でかなりの巨根であろうことは予想していたが、いざ目の当たりにすると驚いてしまう。

（太くて、長くて、カリ高で……ああ、こんなの挿れられたらっ……♡）

見てるだけで、おまんこがうずうずしてしまふ。

（ああ……やらしいな、私って）

「そんなにじつと見られると、照れますね」

紅瀬さんが頬を染めて、恥ずかしそうに言う。

「ご、ごめんなさい！　じろじろ見ちゃって」

「いえ。おかげで、ますます昂ぶってしまいました」

ひよい、と私を抱き上げ、自分の膝の上へ乗せる。

お尻の割れ目にそそり勃った肉棒の先っぽが当たって、それだけでもうゾクゾク♡してしまつた。

（おちんぼ、ヒクヒクしてる……♡これから、このおつきいおちんぼをおまんこに挿れちゃうんだ……♡♡）

「挿れる前に、少しほぐしておきましょう。あなたの小さなおまんこでは、私のモノを呑み込むのは大変でしょうから」

ぬちっ♡ぬちっ♡と張り出した傘で淫裂を擦られる。時折、弄られまくって敏感になっているクリトリスを肉傘がくに♡と押し上げて、それだけで軽く達してしまいそうだ。

ぬりゅ♡ぬりゅ♡

ドロドロ♡に溶け落ちそうなおまんこ肉は、物欲しげにバキバキちんぽに吸い付いてナカへ誘おうとする。

入り口にも達していない割れ目の部分をぬちょ♡ぬちょ♡と擦られ続け、薄い快感を与えられた淫裂はもどかしげにくぼ♡くぼ♡とヒクつく。

「はああ……♡もお、充分ほぐれてますからあ……♡早く、挿れてえ……♡♡」

「焦ってはいけませんよ。もっとトロトロにほぐしておかないと……♡」

ぬち♡ぬち♡と剥き出しの淫芽を、はちきれそうな肉竿で擦られる。

みちみち♡にはち切れそうなクリトリスをむわっ♡と牡の匂いをプンプン振りまいたおちんぽにコスコス♡されると、お腹の奥が燃えるようにかあつと熱くなる。

「お願い……します♡もお……♡挿れて……♡ください♡♡」

懇願し、ぎゅうつと紅瀬さんの首にしがみつく。

「そんなに可愛い声でお願いされては、断るわけにはいきませんね」

紅瀬さんは私の腰をつかむと、ぬち……♡と割れ目を肉傘に押し当てた。

ずんぬにゆううう♡♡♡

「……♡♡」

肉唇を割り開き、下からずりずりいい♡と怒張が膣筒を押し広げてナカへ侵入してくる。

強引に身体の中を拡張られる圧迫感と共に、身体のコを蕩かすような喜悅が滲んで秘奥まで沁みてゆく。

（ああああ♡入ってくるうう♡私の中につ♡紅瀬さんのおちんぽがつ♡♡）

うねる淫肉が肉茎に纏わり付く。絡みつく襷を引つ張り、肉竿はゆつくりとその身を根元まで埋めてゆく。

沈みこんだ肉茎がとちゅっ♡と秘奥を叩くと、ぶるるっ♡とおまんこ全体がわなないた。
「ああ……あなたの奥にようやくたどり着いた……狭くて、温かくて……とろとろで……♡まるで、まんこに抱きしめられているようです」

紅瀬さんが深いため息をつき、私の背中をぎゅっ♡と抱きしめる。

ひくっ♡ひくっ♡と脈動するおちんぽの感觸がお腹の底に響いて、きゅん♡とおまんこが縮み上がった。

ぬぬ……っ♡と紅瀬さんが下から腰を突き上げ、とん♡とん♡と秘奥をノックする。

存分に愛撫されて蕩かされたポルチオをおちんぽで叩かれ、昂ぶった秘奥が痛いくらいに収縮しているのが分かる。

「っはああああ♡っひ♡おっ、おっくっ♡やば……♡♡ああああ♡♡」

「っ……はあ……っ♡一生懸命おまんこで締め付けて……健気で可愛いですね」

ぬるうう♡ばちゅん♡ずちゅ♡ずちゅ♡

奥を小刻みに揺らし、小さいストロークで律動する。

ピンポイントでポルチオを叩かれ、逃げるように腰を上下に動かす。

「っひ♡や♡ああ♡あっ♡あっ♡」

私が律動すればするほど、ちんぼのエラがお腹の裏をゴシゴシ♡挟って、余計に快感が大きくなっていく。

たまらず紅瀬さんにしがみつくと、恥骨とクリトリスが擦れ合って、更なる愉悅が身体を駆け巡った。

（Gスポットもポルチオもクリもっ♡全部全部気持ちいいっ♡こんなのっ、私が知ってるセックスと全然ちがう♡♡）

「あなたのおまんこは…随分と食欲ですね。私から快感を搾り取ろうと雄弁に動いてる」

「ふああああ♡だっっ♡どう動いてもっ♡紅瀬さんのおちんぼがっ♡追いかけてくる、からあ♡♡」

そう、私が逃げようとするばするほど、紅瀬さんが絶妙な腰使いで私のあらゆる性感帯を攻めてくるのだ。

（こんなのっ♡卑怯すぎるよお♡）

「ふふ…私から逃げようとしていたんですか？ いけませんね…♡では、逃げられな

いようもつと深く刺してあげましょう」

紅瀬さんが私の腰をつかんで、膣筒の入り口ギリギリ付近まで肉棒を引き抜く。

そして、そのままずどん——と私の股間に自分の股間をたたき付けた。

「~~~~ッ♡♡ひぐうう~~~~♡♡♡」

ぐるん！と目が裏返って視界が一瞬暗転する。

私のおまんこの奥の奥——子宮口に、亀頭がめりこんでいるのが分かる。

（うそっ♡♡子宮っ♡♡犯されてるっ♡♡こんなのっ♡♡ありえないっ♡♡）

ぐにいい♡♡と身体の内深くが割開かれている。

どちゅ♡どちゅ♡と秘奥を肉傘で重たくどつかれ、じいん♡と痺れるような喜びが下腹部全体に押し寄せた。

「っひいい♡♡うあ♡♡はっひ♡♡んうう~~~~♡♡」

（苦しいっ♡♡のにつ♡♡気持ちいいッ♡♡おまんこっ♡♡紅瀬さんのおちんぼで征服されてるう♡♡）

もう何もかもかなぐり捨てて、メスになりたい。

このおちんぼに隷属して、おまんこだけの存在になってしまえたら、どんなに楽だろう。「子宮を犯されるのはたまらないでしょう？ おまんこがずつとうねってちんぼを離したくないって叫んでるみたいです。私のちんぼを忘れられないよう、しっかりと形を刻んで

覚えさせてあげますから」

ごちゅ♡ごちゅ♡ごちゅ♡♡♡

重たいピストンが、容赦なく蕩けた秘奥を叩く。

一刻も早く上り詰めたくて、自分から腰を振りたくる。

クリトリスを紅瀬さんの恥骨に押しつけて、へこへこ♡と腰をくねらせて自ら強烈な喜
悦を身体に叩き込む。

(クリも♡Gスポットも♡ポルチオも♡全部全部きもちいい♡♡)

「っ♡ん♡お♡お♡♡はひいい♡ごちゅごちゅ♡されてっ♡♡もおむりいい♡♡はっひ♡
♡ん♡あ♡あ♡♡♡」

「……っく……♡そんなに締められたら、もうっ……♡」

どぶううう♡びゅくっ♡びゆるううう♡♡

膜一枚隔てた向こうで、張り詰めた肉棒が爆ぜるのを感じる。

わななくおちんぼが、熱い白濁をどくどくと吐き出す感触が、薄いゴム越しに伝わって
来た。

「っ……はああ♡はあ♡はあああ……♡♡」

ぎゅう、と紅瀬さんにしがみついたまま、へたりこむ。全身から力が抜けて、うまく身
体を支えられない。

「申し訳ない……かなり、無理をさせてしまいましたね」

紅瀬さんが、優しく私の髪を撫でる。

「いえ……私こそ、すみません……こんなに自分が性欲が強いと思つてなくて……」

「とんでもない。むしろ嬉しいですよ。それだけ、私との相性が良いと言う証拠ですから。……ですが、今日のことは、忘れた方がいい。あなたは、まだ彼を待っているんでしょう？」

頭の上から、穏やかな声が振ってくる。

……そうなのだろうか？

私は、玲音を待っているのだろうか？

「……分かりません」

「なら、やはり今日のことはなかったことにしましょう」

ぼん、と私の頭に紅瀬さんの手の平が載せられる。

お互い、気の迷いでセックスしただけ。

ただ、性欲の発散がしたかっただけ。

そう理由をつけてしまえば、きつと丸く収まるのだろうか。

——だけど。

「……あの。ご提案があるんですが」

「なんででしょうか？」

「……わ、私の負債を、代わりに返済してくださいましたよね。あの……その分を身体で

……払わせて貰えませんか」

私は何を言ってるんだろう？

自分から、性欲処理に使ってくれとお願ひするなんて。

でも、これつきりになんてしたくなかった。

この快感を手放したくないと願う私は、おかしくなってしまったのだろうか？

「……なるほど」

紅瀬さんが顎に手を当てて考える素振りをする。

「確かに、必ず返済する——と仰っていましたね。約束をどうしても果たしたい、と」

「そつ……そうですね。玲音のため、でもありますから」

「……………確かに、日々利息が膨らんでいる状態ですしね。その分だけでもお支払いいただくというのは、悪い条件ではない。では、更に業務を追加しましょう。一回のセックスを十日分の利子返済に充てる。それで、よろしいですね？」

「……はっ、はいっ。よろしく、お願ひします」

「三百万円分以上の働きをしていただきますから。期待していますよ」

紅瀬さんが口の端をつり上げて、わずかに微笑んだ。

【続きは製品版でお楽しみください！】